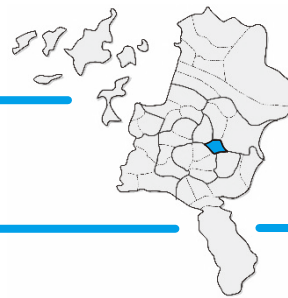


道後地区

人口: 11,142人(高齢化率25.6%)
世帯数: 5,302世帯

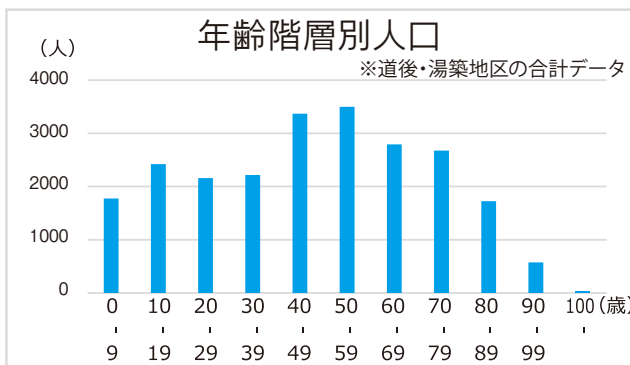


【地区の特色】

道後地区は、政治、経済、文化の中心として古くから発展しており、まさに「道後温泉」の名を冠とした歴史と文化の由緒ある地区名である。道後温泉本館の南東の方角に中世後期に伊予国を支配した河野氏の湯築城跡や子規記念博物館がある道後公園、また、東に四国八十八ヶ所51番札所「石手寺」など観光客や地区住民が訪れる憩いの場となっている。



道後公園 湯築城資料館



【地域住民からみた地域の状況】

地区の強み	<ul style="list-style-type: none"> ・道後温泉や道後公園などの観光資源が多い ・平坦な土地で、災害も少なく住みやすい ・治安がよい ・中心市街地に近く通勤、通学等に便利である ・駅周辺地域は交通の便がよい ・病院、スーパー、学校など生活関連施設に恵まれており、移動図書館や移動スーパーも来るなど生活に便利である ・転校生が多い地域であるが、子どもたちが溶け込みやすい環境にある ・教育熱心な地区であり、通学路の見守り活動等も盛んである
地区の弱み	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者世帯の増加 ・空き家が増えてきている ・自力で移動できない高齢者には、交通に不便な地域が一部ある(石手白石・新石手) ・公民館、集会所の老朽化 ・集会所が少ない(駐車場が少ない) ・マンションなど、町内会に入らない世帯が増加している ・児童が遊べる公園が少ない ・土地の価格が高く、家賃が高い
地域が抱える福祉課題	<ul style="list-style-type: none"> ・孤立した高齢者の増加 ・高齢者は公民館、分館の階段が困難で利用しにくい(エレベーターがない) ・一部移動手段の不便な地域がある(石手白石・新石手) ・住民の防災意識が低い ・自主防災組織が一部団体に限られており、災害時に連携がとれるか不安がある ・地域行事への参加者が少ない ・役員やお世話役、活動に関わる後継者不足 ・マンションの増加や転勤族が多いため、近所づきあいが希薄化している ・人が集まり、活動する場所が少ない ・地域福祉サービス事業の活動がない

道後地区社会福祉協議会

ささ あい ゆ 支え愛 湯ったり暮らせる 道後の福祉

構成団体	地区民協・町内会連合会・自主防災連合会・小学校・中学校・公民館・支所 高齢クラブ連合会
主な取り組み	活動内容
福祉&防災MAPの作成	地区内の社会資源やバリアフリーの整備状況など福祉分野の情報に加え、防災の視点も取り入れたMAPを作成し、地域住民全戸に配布し、役立ててもらっています。
サロン交流会の開催	毎年1回、サロン代表者・世話人交流会を開催し意見交換を行うなど、3サロン(いきいき2、地域交流1)の支援を継続して行っています。
福祉講座の開催	道後・湯築地区社協が合同で、年度2回、高齢者の生活など福祉全般および防災に関する講演会を開催しています。

道後小3年生道後温泉入浴体験

道後小学校と協働し、毎年10月頃3年生児童を対象に歴史的建造物である道後温泉本館において地域の歴史を学ぶとともに、公衆浴場での入浴体験を通して入浴マナーの向上を図ることを目的として、平成24年度から実施しています。※本館保存修理工事中は飛鳥乃湯泉に場所を変え、コロナ禍に伴い周辺施設の見学のみ実施。



<地区社協が目指すもの>

道後地区は、道後温泉をはじめ子規記念博物館、湯築城跡のある道後公園など類をみない文化財や史跡があります。道後地区社協では「支え愛 湯ったり暮らせる 道後の福祉」を基本理念とし、温泉で育まれた温かさと支え合う心を大切に福祉活動を目指しています。また、地区の福祉課題でもある防災関連についても地区社協はもとより、関係機関・団体との連携・協働を推進していくことにより、地域ぐるみで防災意識の向上を図るとともに、子どもや高齢者、障がい者に優しく暮らしやすいまちづくりを目指していきます。

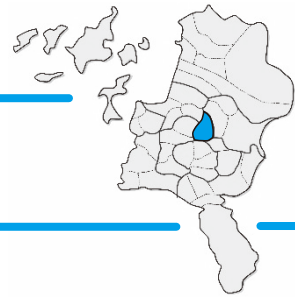
地区の状況	■地区民協	22名 2名	■町内会・自治会・区長会等	27団体
	民生委員		■高齢クラブ	2クラブ
	主任児童委員		■子ども会	0団体
	■まち協の設立	—	■自主防災組織	3組織

歴史的、文化的拠点として観光地、商業地、住宅地として調和のとれた比較的災害の少ない暮らしやすい地区です。閑静な住宅地にはマンションが立ち並び転入者が多い一方で、町内会の未加入率の増加や高齢者世帯の増加などにより地域活動や行事運営に課題を有するなか、地域特有の社会資源を活かし工夫を凝らした取り組みが特徴的といえるでしょう。とりわけ小学生への道後温泉入浴体験の取り組みは、子どもたちに入浴マナーの習得や多世代との交流を「入浴体験」を通して学んでもらい、地域の歴史だけでなく文化や風習への理解を深化させる貴重な機会となっています。こうした経験の蓄積が地域への愛着をさらに育むことでしょう。



湯築地区

人口: 11,609人(高齢化率29.3%)
世帯数: 6,439世帯

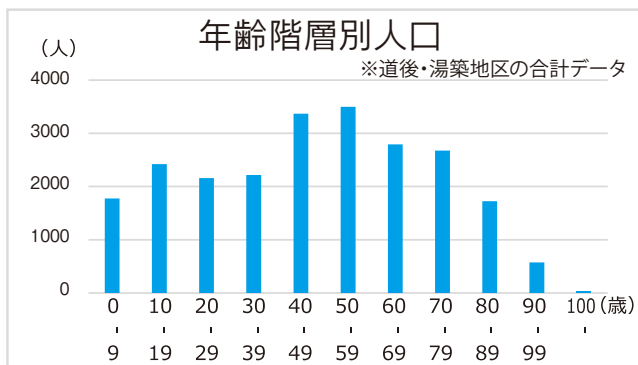


【地区の特色】

湯築は、道後温泉の中心地、道後湯之町・白鷺伝説の鷺谷から西の御幸山の麓まで広がる祝谷(湯湧谷が転訛 旧温泉郡道後村)の農村地域であったが、現在は松山の中心市街地や文京地区に近く、閑静な住宅地として発展変容してきている。近年定住された世帯は高齢者比率が非常に高く独居高齢者世帯も多くなっている。また、農地の宅地転用の中小規模賃貸マンション・貸家の比率が高く、年間の転出入が多い。



道後温泉駅前放生園のカラクリ時計



【地域住民からみた地域の状況】

地区の強み	<ul style="list-style-type: none"> ・道後温泉をはじめ歴史伝統文化史跡が多くある ・中心市街地、文教地区に近く、閑静で自然豊かな住宅地 ・愛媛大学、松山大学が近く、学生や若者が住みやすい町 ・教育に熱心な校区とされ、移住の希望が多い ・病院、介護施設が多い ・秋祭りの炊き出しにおいて団結力がある(祝谷公園)
地区の弱み	<ul style="list-style-type: none"> ・現役世代が少なく高齢者世帯が多い ・坂が多く高齢者が歩くのが大変 ・伊予鉄バスの便が少なく不便 ・地盤が弱く土石流危険箇所が多い ・避難場所が少ない ・交流ができる場所が少ない ・役員のなり手がなく子ども会が減少している ・若者の行事への参加が少ない ・大型マンションが多く安否確認が難しい場合がある
地域が抱える福祉課題	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者世帯、高齢者独居世帯、老老介護世帯が多い ・特に山間部では買い物難民の増加が危惧される ・一部公共の乗り物の不便さがある ・若い世代は共働きが多く行事の参加が難しい ・役員のなり手が少ない ・災害時の支援体制が整っていない ・大型マンションの住人と地域住民の交流が少ない

湯築地区社会福祉協議会 子どもを安心して育てられる町 お年寄りに優しい町 誰もが地域行事を楽しみに参加できる町

構成団体	地区民協・道後温泉旅館組合・道後商店街振興組合・中学校・小学校 公民館・自治会連絡協議会・高齢クラブ長寿会
主な取り組み	活動内容
ふれあい料理教室	食生活の改善や近隣住民とのふれあいの場を目的として5月から9月にかけて毎月開催しています。高齢者を中心に老若男女だれでも気軽に参加できます。
三世代交流	秋祭りの奴踊り、獅子舞や年末年始のもちつき、しめ縄作り、七草がゆ、盆踊りなどの行事を通して、世代間の交流が深まるように活動を支援しています。
福祉講座の開催	湯築・道後地区社協が合同で、毎年2回、高齢者の生活や健康問題などの福祉に関する講演会を開催しています。

湯築小学校5年生入浴体験

平成22年度から始まった入浴体験では道後温泉に初めて入浴する子どもや公衆浴場のマナーを教わる子どもも多く、入浴マナーや道後の歴史などを学ぶことにより、道後温泉の魅力を再発見し郷土愛の醸成を図ることを目的としています。さらに、観光客等に対して、みかんを配る等「お接待」の体験も行っています。



<地区社協が目指すもの>

湯築地区社協は、「子どもを安心して育てられる町」「お年寄りに優しい町」「誰もが地域行事を楽しみに参加できる町」この3つの町づくり基本骨子の推進活動を目標にしています。

<活動方針>①湯築地区地域福祉活動計画に基づき、身近なかかりつけ医の周知啓発を図る。②地区の小学校・中学校への福祉学習支援を行う。③福祉講座開催により福祉活動への参加意欲の自己啓発を図る。④福祉だより等の広報により地域福祉活動の意識向上を図る。⑤ふれあいサロン等、地域住民の交流促進とリーダーの育成を行う。

地区の状況	■地区民協	28名 2名	■町内会・自治会・区長会等	45団体
	民生委員		■高齢クラブ	0クラブ
	主任児童委員		■子ども会	3団体
	■まち協の設立	—	■自主防災組織	1組織

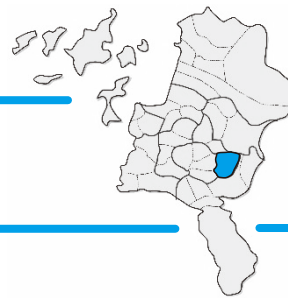
地区社協の構成団体に旅館組合や商店街組合などの観光地特有の団体が参画しており、子どもから高齢者まですべての地域住民を対象とした幅広い地域活動が特徴的です。多くの大学が立ち並び若者層の住民や子育て世代の住民が増加しつつあるなか、高齢者世帯を含めたその他の世代との接点が少なく課題となっています。しかしながら現在取り組んでいる「小学生の入浴体験」「ふれあい料理教室」「福祉講座の開催」「三世代交流」などは、性別や年齢を超え地域住民全体を包括した取り組みといえます。今後はこれらの活動を地域住民だけでなく参画団体と連携・協働しながら拡充していくことで、さらなる地域活動の発展が期待できるでしょう。



くわばら 桑原地区

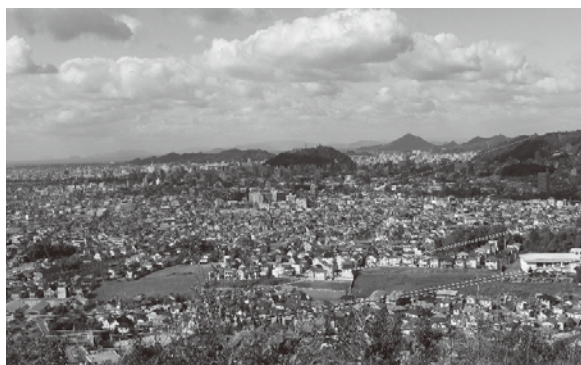
人口: 25,688人(高齢化率27.2%)

世帯数: 12,911世帯

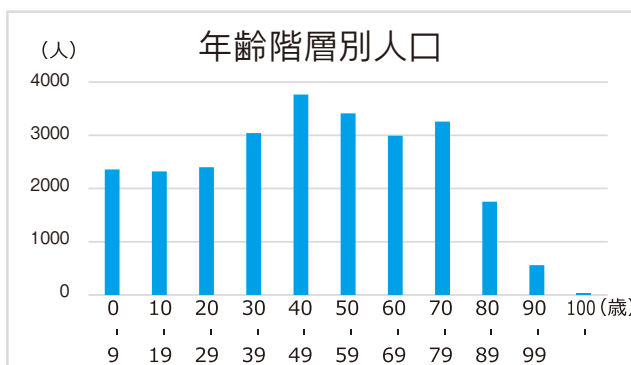


【地区の特色】

桑原地区は、松山市の東に位置し、経石山(きょうせきざん)古墳があり古くから開けていた町である。また、松山藩主久松氏の別邸が「東野お茶屋跡」として残っている。昭和40年代後半からは、都市化の急激な発展とともに新興住宅地が広がっている。現在では、小学校三校、中学校、高等学校各一校、大学は短大を含め三大学が立地している。



淡路ヶ岬から望む桑原地区



【地域住民からみた地域の状況】

地区の強み	<ul style="list-style-type: none"> ・障がい者多機能型事業所きらりの森と児童館が併設されており多くの人が利用している ・松山市中心部にも近く、自然にも恵まれており住みやすい環境である ・2つの大学があり学生や留学生との交流の機会がある ・交通の便もよく、生活関連施設にも恵まれており、生活がしやすい ・まちづくり協議会の活動が盛んである ・青壮年有志の会やくわばら女子会、学生部の交流が盛んである ・防犯対策が進んでいる ・町内行事に参加者が多く、協力的である ・サロン代表者会でサロン間の情報交換が図られている
地区の弱み	<ul style="list-style-type: none"> ・一部地域は住居からお店が遠く、買い物に不便である ・一部地域はバス停までの距離が遠く不便である ・災害の時、一部の地域で山崩れやため池の氾濫が不安材料となる ・大雨による川付川の氾濫の不安がある ・一部の住民でゴミ出しルールが守られていない
福祉課題	<ul style="list-style-type: none"> ・集会所のない地区では、横の繋がりが取りにくい ・買い物場所が遠く、車を持たない高齢者等には不便 ・通学路が狭くて危険な場所がある ・指定避難所としての桑原中学校は上り坂があるため高齢者等の避難には不向き ・高齢化で独居世帯が施設等へ入所することにより空き家が増えているため、防犯面の不安がある ・東部環状線の交通量が多く歩道等の整備が遅れていて危険である ・公民館区と校区の違いにより、同じ町内でも近所付き合いが希薄になる

桑原地区社会福祉協議会 桑原の郷 みなでささえて安心ぞ!なもし

構成団体	まちづくり協議会・広報協議委員会・地区民協・公民館・水利組合・校区婦人会・町内会 自主防災・消防団・防犯協会・高齢クラブ連合会・土地改良区長会・女性防火クラブ連合会 遺族会・交通安全協会・中学校・小学校・支所・更生保護会・スポーツ協会・いきいきサロン
------	---

主な取り組み	活動内容
福祉講座の開催	地域で高齢者が健康で安心して生活できるように、毎年3地区ごとに福祉講座を開催しています。
福祉教育の充実	桑原中学校の生徒が高齢者福祉施設を毎年2回訪問し、利用者の方々と交流を深め、人を敬う気持ちを育てています。
独居高齢者給食サービス	75歳以上の独居高齢者の方々に、特別メニューのお弁当(商品券)を民生委員・児童委員の協力を得て配布し、喜ばれています。

高齢者ふれあい運動会(11月頃)

平成24年から開催している65歳以上の高齢者の運動会で、毎年150名以上が参加しています。高齢クラブやいきいきサロン、地域の高齢者の健康増進や交流の場になるよう活動を支援しています。



<地区社協が目指すもの>

桑原地区は、世帯数12,911世帯、人口25,688名(令和5年4月現在)と松山市40地区の中で6番目に多くの皆さんが生活されています。桑原地区社協では、まちづくり協議会や、民生児童委員との連携強化を図りながら、健全な「まち」としての環境を整え、人の暮らしを見据えたまちづくりを推進し福祉の充実を図ります。さらに、高齢者の生きがいづくり・健康増進等のための「サロン」活動やレクリエーション活動を推進し、多様な人材の出会いや交流を深めて活動の幅を広げることに努めます。また、地域の防災・減災・防犯活動を通して地域安全の向上を目指します。

地区の状況	■地区民協	39名 2名	■町内会・自治会・区長会等	22団体
	民生委員		■高齢クラブ	7クラブ
	主任児童委員		■子ども会	13団体
	■まち協の設立	平成21年度	■自主防災組織	22組織

市中心部に近いながらも自然豊かで、小学校から大学まで数多くの教育施設が立ち並び文教地区です。高齢化が進展するなかで、高齢者の単身世帯や空き家が増加し防犯や災害時の対応など課題がある一方で、就学児や若者世代も多く彼らへの「福祉教育の充実」や、「高齢者ふれあい運動会」「独居高齢者給食サービス」などの取り組みがなされています。若年層からの福祉教育は、地域住民の一員としての自覚を芽生えさせるほか、自己肯定感や対人関係の向上、人権の重要性を実感する貴重な機会となり、また、高齢者ふれあい運動会は、参加者の心身の健康維持だけでなく仲間意識の向上など地域住民の凝集性を高め、地域住民間のつながりがさらに強固なものへともたらすことでしょう。

